

フランス人は——語源学への熱烈な興味をあらたに見出して——物語構造の研究を意味する用語、ヘナラトロジ「物語論」をつくり出した。英米の学界は、ヘーオロジ「ヘー学」という語を無思慮に用いることに懷疑的であるが、それには正当な理由はあるのだろう。しかし、名称の疑わしさとテーマの正当性は混同すべきではない。図書館に行くと、小説、叙事詩、シヨート・ストーリー、物語、フェアリオ「韻文滑稽譚」などの特定のジャンルについての研究書は数多く並んでいるが、物語全般をテーマにして論じた英文の書物はほとんど見つかからない。物語とは、そもそも何なのか、という決定に関わる問題は、ジャンル間の差異の分析を超えたところに存在している。文学批評家は、たとえ映画、漫画、絵画、彫刻、ダンスの動作、音楽を通じて、日々、さまざまな物語を楽しんでいるにしても、考察の対象とするのもっぱら言語媒体による物語であるという傾向が見られる。これらのさまざまな芸術作品のあいだには共通の基盤が存在しているにちがいない。さもないと、「眠れる美女」を、映画、バレエ、パントマイムなどにかたちを変えて表現できるといふことの説明がつかない。

これらの問題を考えるのに、私にとって最も刺激的なアプローチとは、アリストテレスの伝統を受けつぐ二元論的、構造主義的なものである。ロラン・バルト、ツヴェタン・トドロフ、ジェラルド・ジュネットらのフランス構造主義者たちにしたがって、私も内容 (what) と形式 (why) を提起する。物語の内容を「ストーリー」「物語内容」、物語の形式を「ディスコース」「物語言説」と呼ぶことにしたい。第一章では、私の立論とその前提について短く述べる。第二章、第三章では、「ストーリー」の構成要素である出来事と存在物(登場人物と背景)を中心に取り上げ、第四章、第五章では、このストーリーを伝達する手段である「ディスコース」を扱う。これらの大きな二項目については、ディスコースを先に、ストーリーを後にというように順序を逆にすることもできるという点では、私のこの配列は恣意的である。だが、私が本書でこの配列を好んで採用したのは、このほうが物語の理論化をめぐる歴史をよりよく反映できるように思われたからだ(私はこの話題を直接論ずるつもりはない。歴史的考察については、最小限、議論の背景として紹介するにとどめる)。しかし、できればそうしてあげたいと思っても、自分の好きな章を選んで読む、あるいは、本書を後ろから読みはじめるなどといった、最近流行りの選択権は読者に提供することはできなかった。これはあくまで私見だが、理論たるものは、各部分の意味をもつためには、その全体を読まなければならないのだ。

理論は、それについて書くのと同じくらい、読むのが難しい。理論は厳格なものであり、頑なであり、また退屈でもある。私は理論を活気あるものとし、その特異性を堅苦しいものではなく好奇心をかきたてるものにし、とりわけ可能な限り実例を引用することにより、その実用性を証明し明示するため最善をつくした。本書を執筆する際には、しばしば実例が最初に浮かんで、違いを明らかにする特質が具体化したこともあった。私は、理論についての理論によって示されるかざらずの見解を、実例によって証明したばかりか、優雅に洗練させたのである。これはいわば芸術が私を救ってくれたということだ。理論を展開するための学術的な散文がコンラッドのねちねちした文章と悪戦苦闘しているとき、それならむしろ、自由間接話法の細部を読んでその一部始終を知る

ことのほうがいっそう快適でもある。実のところ、本書の価格と読める範囲のページ数を考慮したために、楽しくて、そして見つけるのに苦労した描写の実例を、多数切り捨てねばならなかったのである。

実際、論のバランスと扱う範囲の問題を優先せねばならなかったため、理論の提示は、ちょうどこの程度にとどめて、それ以上は行わなかったことを、私はきちんと説明しなければならぬ。私の第一の関心は、ストーリー対デイスコースという二分法から派生する諸問題をできるだけ明確に解決すること、そこから喚起された種々の洞察力に富む見方——私自身と他の批評家によるもの——を説明することであった。それゆえ私は、文学研究者たちが興味を寄せてきた物語に関する多くのテーマ——創作、模倣、ジャンルの歴史的発展や、それに、物語と文学的な諸相をもった諸分野との、たとえば文化人類学・哲学・言語学・心理学などとの関係——を除外した。物語に影響をおよぼす個々の興味深い問題をすべて一冊の本に収めることは不可能である。それに、それらにただ言及するのみで中心的議論へと収斂することがないのであれば、言及しない方がましであろう。私は、「物語とは何か」という問題に対して、無理のない現代的な解答を提示する。つまり、「どれが物語にとつて必要なものであり、どれが付随的な構成要素であり、そしてそれらはどのようにして相互に関連しているか」である。しかし私は、物語について発見できることをすべて説明したいとは思わない（またそれは、私にはできないだろう）。とりわけ私は、内容よりも形式に、あるいは形式として表現できる場合の内容に関心がある。私の主な目的は、物語の表層に見られる形式——たとえば、言葉のニュアンス、グラフィック・デザイン、バレエの動作——ではなく、物語の形式である。この意味における「様式（スタイル）」、すなわち、媒体のテクスチャー（肌理）がもつ特徴は魅力的であり、私の作品を読まれた方ならば、私が長い時間をそれに費やしてきたことをご承知だろう。だが、本書においては、私が様式上の細部に関心を示すのは、ただただそれらの細部が、物語のより広範で、より抽象的な運動に関わりがあり、またその運動を明らかに示してくれるからなのである。

私は特に物語構造の問題において、際立って重要で、論議を呼び、難解であると思われるものに焦点を当てて

論じた。「視点」「意識の流れ」「物語の声」「三人称の語り」といった用語は、批評的議論においてしばしば乱用されてきた。術語を明確にし、批評概念をできるかぎり実践可能で、それでいて首尾一貫したものとするため、厄介な事例、前衛的な物語、極端なケースの説明も行うつもりだ。容認されている意見の概略を集めることよりも、広範囲におよぶさまざまな物語テクストに適応できる理論を打ち立てることに私は関心がある。もつとも、熱心な読者からの反例は歓迎したい。私は多くの問題に触れはしたが、解決のむずかしい問題、とりわけ再定義が要求される場合には詳述を試みた。それらは、理論それ自体のためというよりも、物語の理論に寄与するためである。

理論というのはメタ批評なのだから、私は何ら恥じることなく、多くの批評家や理論家たちの著作から引用させてもらった。したがって、ウエイン・ブース、ミハイル・バフチン、バルト、ジュネット、トドロフからのかなり大きな引用の塊ができあがった。私の目的は、論駁することではなく、英米、ロシア、フランスの最も説得力ある卓見を統合することである。私は特定の学派に賛同しない。私が興味を抱くものとは、作者や読者たちの実践と同様、理論家や批評家たちが遂行する実践——振るまいとでも言いたくなるもの——にほかならないのだから。

最後に、ひとつの特定の作品について述べてみたい。それは、私が持続的に興味を抱いてきたのがわかるほど何度となく引用した、ジェイムズ・ジョイスの『イーヴリン』である。実のところ、この物語には恋愛感情にも似たものを感じている。私が物語理論についての初めての冒険を試みた際に扱ったのがこの作品で、それはロラン・バルトの一九六六年の技法をきわめて詳細に応用したものだ。だが、『イーヴリン』に対して私が抱き続ける興味は単なる感傷にとどまらない。私はみずからこの物語を読んできた歴史をたどることによって、新しい題材であったならば頭に浮ぶことのなかったであろう、分析的階層をなして横たわっている理論的関心のありようを明らかにすることができたのだ。さらに、この私の最初の論文と本書とを比較すれば、フランス語を読ま

ない人であっても、〈物語論批評家〉^{ナラトロジスト}たちのあいだに見られるのと同様の発展史に似たものを見出すはずだ。

あらゆる場合において、注記した場合を除けば、引用の英訳はすべて私が行った。

感謝の言葉を、まずはゼルダ・ボイドとジュリアン・ボイド、エリック・ラブキン、ジョナサン・カラー、バーナード・ケンドラー、バーバラ・ハーンスタイン・スミス、スーザン・スレイマン、トマス・スローンの好意的な批評と助言に対して述べたい。私はまた、本稿をまだお読みいただいてはいいないが、以下の方々から多くを学んだ——ロバート・オールター、ロバート・ベル、クリスティン・ブルック・ローズ、アライン・コーエン、ウンベルト・エーコ、パオロ・ファブリ、マリリン・フェイブ、スタンリー・フィッツシユ、ジェラルド・ジュネット、ステイヴン・ヒース、ブライアン・ヘンダーソン、フレデリック・ジェイムソン、ロナルド・レヴァコ、サミュエル・レビン、ルイス・マーチン、クリスチャン・メッツ、ブルース・モリセット、ラルフ・レイダー、アラン・ロブ・グリエ、ロバート・スコルズ、ツヴェタン・トドロフ。また、コロラド州ボルダーにて開催された一九七七年夏季美学学会と、カリフォルニア州アーヴァインにて開催された一九七七年の批評講座に参加された方々からも。また、ロラン・バルトの研究に私は特別の感化を受けた。

私は、カリフォルニア大学バークレー校の研究委員会には、本書執筆中に経済的支援をいただいたことを感謝申し上げる。ジュディス・ブロックとマーガレット・ガナルには、原稿準備の際に、はかりしれない助力をいただいた。

以前に刊行した論文の使用を許可してくださった編集者、出版社にも感謝したい。第二章の一部は、「ジュネットの時間関係分析について」として *L'Esprit Créateur*, 14 (1974) に掲載された。第一章の一部は「物語の理論にむけて」として *New Literary History*, 6 (1975) に、第四章の一部は「小説と映画における語りと視点」として *Poetica*, 1 (1974) に掲載された。第五章の一部は「ロジャー・ファウラー編 *Style and Structure in Literature*」

Essays on the New Stylistics (Basil Blackwell, 1975) 中の「物語伝達の構造」を転載したものである(版權は一九七五年バジル・ブラックウエル社所有、コーネル大学出版社とバジル・ブラックウエル社からの使用許可にもとづく)。

カリフォルニア州バークレーにて
シーモア・チャットマン